

---

## 【研究ノート】

### 主観性の生産と夢

#### ——ガタリの夢のテクストを中心に

有馬景一郎

---

#### はじめに

フェリックス・ガタリは「主観性の生産」という問題を繰り返し取り上げた。主観性の生産とは、精神のメカニズムにおける「美的なものの生成」であり、永遠回帰的な構造を持つ肯定的な変容である（1）。本研究ノートは、ガタリの「主観性の生産」と夢の連関について概観し、主に美的な生成の面からガタリの夢についての捉え方を浮き彫りにする。ガタリは夢に関わるいくつかのテクストを残している。彼は自身の夢を分析し、自己の実存の領土の生成について書いている（2）。その方法は精神分析的な夢解釈とは異なるものだ。また夢について、オーストラリアのアボリジニの論理を参照する（3）。ガタリはアボリジニを専門にする人類学者バーバラ・グロチュスキを二度にわたって自身のセミナーに招いた（4）。グロチュスキのアボリジニを取り扱った博士論文はガタリを参照しており、ガタリとグロチュスキは相互に参照関係にある（5）。また、ガタリはカフカの夢についてのテクストを複数残している（6）。これらの夢についてのテクストにおいて、ガタリは精神分析とは異なる仕方でも夢を肯定的に掘り出している。

#### 第一節 ガタリの夢分析

ガタリは夢についてどのように考えているのだろうか。ガタリの夢の捉え方は精神分析的な夢の解釈とは異なる。ガタリは精神分析的夢についてエネルギー的な一時過程とそれを抑圧する論理の対立として捉えている。ガタリは「存在と意味のリトルネロ」というテクストにおいて自身の夢を分析する。ガタリは夢による意味作用の歪曲化は、機械状のものに関与するという（7）。どうということか。夢における意味の切断や裂け目は「生まれつつある主体化」の表れであり、脱テリトリー化する開放なのである。ガタリにとって夢は「創造的で機械状の連鎖の多種多様な能動的な生の世界」に結びつく（8）。フロイトは夢についてエネルギー的な

流出と意味の自由な変化を「一時過程」と捉えた。そしてそれを拘束、制御する二次過程、あるいは無意識的な欲動とそれを抑圧する検閲と捉えた（9）。それに対して、ガタリの夢の捉え方はむしろ多方向に開かれている。ガタリにとって夢は解釈され意味付けされることよりも、主観性の生産に関わるといっていいだろう。「存在と意味のリトルネロ」においてガタリは独特のやり方で自身の夢を分析する。彼は夢に現れる顕在的な表象のいくつかを「平行したり交叉したり」（10）する方向線を探し出すことに重きを置く。それらの表象とは「町、広場、囲む道路」、「忘れられた車」「ヤシヤ・ダヴィッドとジル・ドゥルーズについての言い違い」、「深い淵」そして「嫉妬に関する制止」である。それらの要素は分岐としてさまざまな形で結びつき複数の宇宙を構成する。ガタリは自身の夢を分析し、女性についての愛情やそれについてのためらい、彼が過ごした複数の町、そこでの彼に関わる人々との出会い、同性愛についての意識、ガタリの父の死などが変換され複雑に結びつくことを明らかにした。それらの要素はポリフォニー的に構成される。複数の分岐の結びつきはガタリ独特のシナプス機能という働きによるものだ。そのような状況は非物質的宇宙  $U$  と機械状門  $\Phi$  の関係の仕方によって考えることができる。それらのあらゆる要素の結びつきは、複数の宇宙としていたるところにあると同時にどこにもない、あるいはあらゆる相が区別されていながらその全体が区別されずにある状態である。そのようなガタリの夢は彼の実存にとって重要な核を構成する。彼の夢は「死の不安を払いのける」手段として彼自身の実存の領土を構成する。ここには、ガタリにおける「主観性の生産」のメカニズムが働いている。どうということか。ガタリの方法はこうだ。精神分析的な夢判断は、無意識下における過去の記憶と現在の症例の結びつきを解明する方向に向かう。しかしながら、ガタリは自身の夢を分析し、その中でポリフォニー的な構造と複数の要素が結びつくシナプス的な働きを捉えている。彼の夢は多方向に開かれている。ガタリは夢によって見いだされるいくつかの自身の核の中から能動的な生の世界へ至る線を見出し、死の不安を克服す

る。ガタリは自身の夢を分析することで肯定的な変容を可能にしたのだ。

## 第二節 アボリジニの夢

ガタリは自身の「主観性の生産」という概念を練り上げる時に、さまざまな概念群を用いる。アボリジニの論理や夢の技法について検討することは、ガタリはアボリジニの概念群について理解を深める上で有効であると思われる。ガタリはアボリジニの論理を参照している。とはいえ、アボリジニを主題にした論考があるわけではない。そこで、グロチュスキを招いたセミナーの講演録とそこでのガタリのコメント、およびグロチュスキのガタリについての論考を検討する。

ガタリが参照するアボリジニの夢はどのようなものだろうか。アボリジニには「ドリーミング」といわれる集団的な夢見の技法がある。グロチュスキの研究はその「ドリーミング」について論じたものである。アボリジニの夢の捉え方は独特であり夢は非常に多義的な意義を持つ。本節においてはグロチュスキの研究を網羅することはできないので、ガタリに招待された講演録で述べられたアボリジニの夢見技法について特徴的な部分を取り上げる。グロチュスキの研究はアボリジニのワルピリ族における彼らの夢見の技法を取り上げる。彼女によれば、夢は現在であり、とても遠い過去、歴史的な時間ではなく変態の時間であると言われる（11）。他方で夢は神話でもある。夢はわれわれ人類にだけみられるものではなく、自然や文化に存在するものはすべて夢がある（12）。夢はある意味での創造であり、あらゆる可能性の貯蔵地である（13）。夢はあらゆる元素の組み合わせである。しかしながら、夢は不連続性をもち、意味付けしない仕方でのつながりを持つ（14）。夢は集団的準拠としてワルピリ族の行動を規律し、実在の領土と切り離さない。

ワルピリ族は領土についての捉え方も独特である。彼・彼女らは領土を所有するのではなく彼・彼女らが領土に属するという（15）。そして時間と空間は切り離してとらえることができない。つまりある時間や場所はその時間や空間だけを取り出すことができず、その固有性を持つと言えるだろう。また、彼・彼女らはワルピリ族に伝わる特異な伝達の方法を用いる。彼・彼女らは手の言語を用い、砂に描かれた図表でやりとりを行う（16）。また夢やダンスは、彼・彼女らにとって記憶の伝承方法でもあるのだ（17）。記憶について身体を介した集団的方法を駆使しているともいえる。また、彼・彼女らが伝達するのは意味的なものだけではない。非意味なコミュニケーションを行っている。逆に彼・彼女らのメッセージは作った人から言われた場面に結び付かな

いと理解できない。そのような夢見の技法あるいはコミュニケーションの方法についてガタリは「非意味的な風景の構成」そして、「内容の自己利用」と表現している（18）。彼・彼女らの主観性はこのように集団的に構成される。

ドリーミングは「ドリームタイム」とも呼ばれることがある。ロバート・ローラは浩瀚な『アボリジニの世界』の中で、ドリームタイムを「存在の絶対的根底ないしあらゆる差異を生み出す根本的宇宙的な連続体」と捉えている（19）。保莉実はドリーミングについて、あらゆる時間、歴史、大地、規範、正しい道といったような複合的な側面で捉えている（20）。デボラ・B・ローズはドリーミングが歴史であり物語であり創造主であると述べる（21）。このようにアボリジニのドリーミングは、非常に複合的な側面を持つ。

アボリジニの人々は夢を非常に多面的な側面を持つものとして利用する。彼・彼女らにとって、夢とは寝ている時に見ているものでありながら、過去と現在を即時的につなぐ時空間の座標でもあり、実際のオーストラリアの大地に描かれた移動の行程に結びつき、まさに彼・彼女らの実在の領土を構成するものであり、一族の集団的な生活の仕方を規定するものであり、それ以上にどのように生きていくのかという倫理的な在り方をも含むものである。アボリジニの夢は、ガタリが後年主張する「三つのエコロジー」という環境だけにとどまらない、主観性や社会の領野を含めたエコロジーの一つのモデルを提示しているとも言えるだろう。アボリジニの夢の利用の仕方は、夢は解釈されるものだけにとどまらず、生き方の指針のようなものになると同時に実在の領土にもかかわるのだ。

## 第三節 ガタリによるカフカの夢分析

ガタリはカフカの夢のアンソロジーの中でカフカの夢を分析する。カフカは彼の作品と日記や書簡を何度も往復する。カフカは精神分析による夢の解釈に興味を持つものの、遂にはそれに満足しなかった（22）。カフカは自分で夢を分析し始める。そして自分の夢を近親者に手紙で送り、さらに彼らに対して夢を送ってもらうように頼む。ここには複数の人物による夢の共同作業が伺われる。カフカは夢の中で「意味をなさない地点」を「増殖、拡大」させ、「別の想像的構成、別の考え、別の人物、別の精神的座標」を生み出そうとする（23）。このことをガタリは「主観性の生産」として捉える。主観性の生産とは、精神のメカニズムにおいて、美的なものが生成されることである。ガタリにとって美的なものとは特異な質の生成と変幻する座標の二つのものの生成である。カフカ作品における夢の中の特異点は、時間、空間、身体、

意志などの変容に対応し、「カフカ的な物語に固有の《世界の変化》」に影響を及ぼすとガタリは考えていた(24)。ガタリはカフカの作品に「過程的」な作用を見出す。カフカの作品の「根本的な未完成性」あるいは「恒常的な不安定性」が読者の心中に過程的な作用を引き起こす(25)。カフカ作品から生じる謎の効果や永遠の曖昧性は「非シニフィア的な過程」の横断する線として見出されている。カフカの作品から与えられる謎や曖昧さはカフカ作品を読むものにとって残り続け、カフカ読者の主観性に影響を与える。ガタリにとってカフカは「無意識の形成の正真正銘の分析家」である(26)。カフカの作品において、「突然何かあるものが作動して、増殖し始め、そのあるものがそれ自らのためにのみ存在し始める」(27)。このような過程をガタリは精神病の道程に少し似ていると考える。

ガタリはカフカが夢の特異点をどのように扱うかという技術について三つの形で図式化する。第一の図式は「小さな出来事が《大きな破局》を引き起こす」ものである(28)。これは作品においては『判決』のゲオルク・ベンデマンが身を投げたり、『変身』のグレゴリー・ザムザが悪夢のような状況に見舞われることである。第二の図式は夢のテキストと文学的テキストが識別不可能になることである。ガタリは『訴訟』においてそのような図式を見出す。そして破局的な結末ではなくむしろ過程／訴訟から癒される結末へ導くことが可能であると考え。第三の図式は、ささいな出来事が物語を推し進める原動力となることである。特に『城』の執筆中にそのような文学的過程の成熟が見られるという。ガタリはこのようなカフカの夢を取り扱う仕方を彼の文学創作と密

接に関連があると考え。あるいは、夢について書き記し、書簡で送ることは、作品の異本のようなものとして成立する。

カフカの夢のプロセスは、ガタリがCSで明示した主観性の生産のメカニズムとして捉えることができる。何かあるものの作動とは、「表現機能」による可能的な領域への開放である。増殖しはじめるとは、フラクタル化あるいは積分という作用による輪郭線の変形である(29)。それ自らのためにのみ存在し始めるとは、実在の領土と非物体的宇宙が結びつく異質生成である。このようにガタリはカフカの作品やその創作過程をまさに「主観性の生産」の具体的な例として考えていた。

## おわりに

ガタリが夢について述べたテキスト、および彼が関心を抱いていたアボリジニの夢について検討を重ねてきた。両者の検討によって明らかになったことは、精神分析的な夢の捉え方とは別の仕方でも夢を扱うことができるということだ。ガタリは夢を過去の記憶として捉えて、それを解釈するだけではない。むしろ、ガタリは夢が実存の領土の構成にかかわるあり方を明示したといってもいいだろう。検討すべき部分はまだまだ多く残されているが、ガタリの夢についての捉え方を明らかにし「主観性の生産」の具体例として夢の利用の仕方を提示することで本稿の目的は達したと考える。

## 註

1. 本稿は執筆者が2021年に放送大学大学院に提出した修士論文「フェリックス・ガタリの『分裂分析的地図作成法』における四機能素の研究 美と永遠回帰の観点から」における論点を基に、修士論文では検討されなかった観点からの検討を行うものである。執筆者の修士論文は刊行予定の『放送大学文化科学研究』(The OUJ Journal of Arts and Sciences) 第2巻に、その内容が掲載予定である。
2. Félix Guattari「存在と意味のリトルネロ(A・Dの夢の分析)」*Cartographies schizoanalytiques*, Galilé, 1989。『分裂分析的地図作成法』 宇波彰他訳 紀伊國屋書店、1998。以下、CS。CS, pp.235-249, 295-312頁
3. *ibid.*, p.92, 112頁, p.240, 312頁。Félix Guattari *Chaosmose* Galilé, 1992。『カオスモーズ』 宮林寛他訳、河出書房新社、2004年。以下、Ch。Ch, p.31, 213頁。
4. バーバラ・グロチュスキの著作あるいは論文は多数刊行されている。翻訳は「ガタリと人類学 アボリジニと実存的領土」現代思想 44(5), 113-127, 2016-03 青土社 がある。本稿で参照したグロチュスキのセミナーは“Les Warlpiri, I & II séminaires 1983 & 1985” *Chimères* ; N° 1, 1986。(以下 Warlpiri) [https://www.persee.fr/doc/chime\\_0986-6035\\_1987\\_num\\_1\\_1\\_1019](https://www.persee.fr/doc/chime_0986-6035_1987_num_1_1_1019) (最終閲覧日 2022年12月30日)
5. 「ガタリと人類学 アボリジニと実存的領土」116頁。

6. フェリックス・ガタリ 『カフカの夢分析』ステファン・ナドー編注 杉村昌昭訳 水声社、2008年。
7. CS, p.235,295頁。
8. *ibid.*, p.248,311頁。
9. フロイト 『新訳 夢判断』大平健編訳 新潮社 2019年。
10. CS p.242, 303頁。
11. Warlpiri, p.7.
12. *ibid.*, p.16.
13. *ibid.*
14. *ibid.*, pp.18-19.
15. *ibid.*, p.9.
16. *ibid.*, p.8
17. *ibid.*, p.20, p.25.
18. *ibid.*, p.22.
19. ロバート・ローラ 『アボリジニの世界』青土社、2003年。357頁。
20. 保莉実 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店、2018年。
21. デボラ・B・ローズ『生命の大地 アボリジニ文化とエコロジー』保莉実訳 平凡社、2003年。
22. 『カフカの夢分析』34頁。
23. *ibid.*, 36頁。
24. *ibid.*, 51頁。
25. *ibid.*, 72頁。
26. *ibid.*, 148頁。
27. *ibid.*, 150頁。
28. *ibid.*, 57頁。
29. 執筆者はガタリのパルテュス論を取り上げて「フラクタル化」という動きについて報告を行った。於社会芸術学会 2022年7月30日オンライン。